

## 高校生のための都市まちづくり研究入門

### Chapter 3 a 阪神地域の都市のなりたち2～都市化の進展前編～

Chapter 3では、Chapter 2に引き続き、客野尚志先生の「阪神地域の都市化と生活環境の変化～都市化がもたらしたものの～」などから、“プラタモリ阪神地区版”（続き）として、旧神戸居留地から広がっていった外国文化の影響から話を始めます。

#### 3-1. 外国文化の影響

1868年から1899年までの間、安政5カ国条約に基づいて、江戸幕府そしてそれを引き継いだ明治政府は、兵庫津の約3.5km東にあった神戸村に神戸外国人居留地をもうけます。東を旧生田川（明治に入って掛け替えられ、現在はフラワーロードになっています）、西を鯉川（後の鯉川筋）、南を海、北を西国街道に区切られた区域を、都市計画に基づいた整然とした街並みができあがります。これが、近畿圏における外国文化流入のまどぐちの一つとなります。

図3-1は建設されてから半世紀後の旧神戸居留地の区割りですが、現在もほとんど変わっていません。

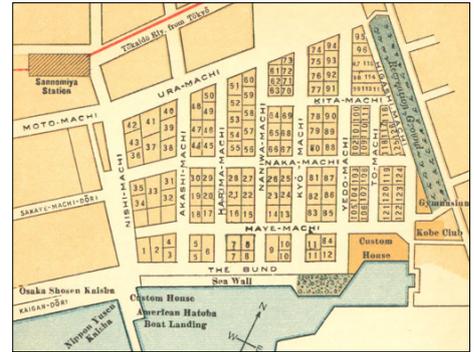


図3-1. 旧神戸外国人居留地の区割り; Terry's Guide to the Japanese Empire (1920)。図の左上、現在の元町駅は当時は三宮駅と呼ばれていました。

#### 神戸外国人居留地がもたらしたもの

神戸外国人居留地周辺に住んだ外国人商人が持ち込みそして根付かせた外国の文化や宗教、生活様式は、当時の日本人にとっても新鮮にうつり、そのような文化の多くが市街地の展開に伴い、東の阪神地域へと広がってゆきます。船場の商人文化を背景に大阪から移り住む時代の変化に敏感な中産層が、元町付近から展開してきた新しい西洋の文化、生活様式に触れることにより、その文化が独自の進化をとげ、いわゆる**阪神間モダニズム**が形成され、現在までこの地の文化に大きな影響を与えるにいたるのです。

例えば、阪神間地域は歴史的に**洋菓子屋**や**パン屋**が多い地域ですが、これは洋菓子やパンを食べるという文化、ま



図3-2. かつてを偲ばせる旧居留地15番地

視点3-1. どんな外国文化が神戸から日本に広がったか、“リサーチ”しましょう。

食文化では、住文化では？、そして軽工業や重工業では？ 例えば、1873年、神戸にハンター商会 (E.H. Hunter & Co.) を設立、大阪で大阪鉄工所を運営したエドワード・ハズレット・ハンター (Edward Hazlett Hunter, 1843~1917) は日本人女性と結婚、のちに範多財閥・日立造船として発展させます。彼が建てた旧ハンター邸は文化財として、現在、王子公園で公開されています。

同時に、そこで働く方々はどこから集まってきたのでしょうか。明治以前の神戸は家々もまばらな場所でした。現在、住んでいる皆さんはどこから来たのでしょうか？ そのなかには、皆さんの曾祖父母、祖父母、ご両親も含まれるかもしれません。そこには“まち”の発展とともに、皆さん自身の“Family history”が浮かび上がります。

たその製法が神戸から伝わってきた事、またそれを食し、コーヒーや紅茶と合わせて楽しむという生活様式が敏感な層に受け入れられたためです。またこの地のファッションスタイルは独特の上品さがあるとされておりありますが、それも上記のような理由が背景にあります。

### 植民都市としての外国人居留地の周辺

アジア・アフリカなどに建設された他の植民都市と同様、神戸居留地周辺にも多様な「街」が発達します。その一つは、現在の大丸百貨店から鯉川筋を挟んで、西に伸びる旧西国街道（図3-3）ぞいに発達した**元町**です。もともと西国街道沿いの海運・酒造業などの商業地でしたが、神戸港を介して海外文化の入口として発展します。

一方で、外国人居留地の周辺には、“雑居地”も広がります。これは、居留地の工事の遅れなどで地域を区切って暫定的に外国人の居住をみとめたものです。この結果、もうけられたものですが、このため、山麓部に異人館などが建てられる結果になりましたが、同時に、元町からさらに海岸よりの「雑居地」には清国人街が形成されます。これが現在の**南京町**です。これは、明治維新の際、当時の清国との間で条約などがかわされていなかったため、清国人（中国人）の方々は居留地内に居住できず、かわりに周辺の雑居地に住むことを余儀なくされたためです。



図3-3. 当時の道幅を偲ばせる旧西国街道（現三宮オーパ2の北西角から東をのぞむ）。



図3-4. 現在の南京町

## 3-2. 学問の場と山岳スポーツの発展

少し話が脱線するかもしれませんが、話題を少し展開させましょう。それは“**学校**”と“**山岳スポーツ**”です。それではまず、“学校”から。

### 阪神間モダニズムと学校教育

関西学院、神戸女学院、甲南大学などもこの文化の中で生まれ育まれてきたのですが、一方でその急激な都市化の中で翻弄されてきたといえるでしょう。アメリカ人の宣教師であるWR・ランバス<sup>1</sup>は元町居留地に英語学校を設け、それが元となり現在の関西学院が誕生します。ランバスは当初居留地に近い場所（現在の栄光教会）に英語塾を開きました。その後、その場所が手狭となり、新しい場所を探し求めました。本来は居留地付近の利便性の高いところを開学したかったようですが、地価が高いため断念し、当時の郊外であった原田の森にキャンパスを開いたようです。当時の居留地付近は、外国の文化や宗教に大きな影響を受けて教会も多くありまし



図3-5. ランバス記念伝道女学校。関西学院創立者WR・ランバスの母MI・ランバスが1888年に設立、その後、合併等で聖和大学を経て現在は関西学院大学教育学部になっています。

<sup>1</sup> Walter Russel Lambuth (1854~1921) : アメリカの宣教師、医師、教育者。宣教師で教育者の父ジェームス・ウィリアム・ランバスとともに1886年（明治19年）に来日、南美以神戸教会（現在の神戸栄光教会）初代牧師に就任、英語学校（現パルモア学院）を開設、1889年に神戸市郊外の原田村に関西学院を創立します。

た。これらからあまり離れずなおかつ静かで、阪神間の中産層の比較的裕福な家庭の子弟を教育する場として自然豊かな都市近郊林はうってつけであったのでしょう。

しかし、その後、キャンパスが手狭になったこと、また周辺の都市化がさらにすすみ、学問のための静謐な環境が損なわれ始めたことからさらなる郊外の地である現在の上ヶ原にキャンパスを移します。その背景には、線路拡張計画によりさらなる土地が必要となった阪急側からの土地交換の提案があります。当時のニュータウン地区であった上ヶ原に白羽の矢が立ったわけです。上ヶ原は台地の上部にあり、市街地からも距離があり、周辺には農村と水田が広がる地域であったので、静かな教育環境という点では理想的であったのです。その後、市街地化が進みますが、関学のキャンパス内には豊かな緑地が現在まで保全されています。



図3-6. 旧原田の森キャンパスに唯一残る当時の建物、旧ブランチ・メモリアル・チャペル（現神戸文学館）。

さて、関西学院の礎となった王子公園付近ですが、当時は原田の森と呼ばれていたことからわかるように「森」でした。この「森」には関西学院だけでなく、現在でも多くの学校が見られ、また歴史的にみてもそのルーツがこの地にあるという学校が多くなります。たとえば、神戸高等商業学校（現神戸大学）、県立神戸商業学校（現星陵高校）、県立神戸高等商業学校（現兵庫県立大学）、松蔭女子専門学校（現松蔭女子学院）、六甲中学校などがこの地にルーツをもちます。

関学はじめ阪神間の学校はおしゃれでハイカラというイメージが筆者を含めて、一定以上の年齢の方には強くありますが、その背景には居留地発の外国文化の影響を強く受け、阪神間モダニズムに育てられてきたという歴史的経緯があるのです。現在の上ヶ原キャンパスにも多くの緑が保全されていますが、当時、原田の森で緑や木立に抱かれながら研究や学問をすすめてきた遺伝子が今に残されているのでしょう。上ヶ原キャンパス周辺の地域については、後編でまた触れたいと思います。

### 視点3-2. 教育機関とまちづくり、そして交通機関

日本の**近代化**において、**高等教育機関**が大都市に作られていきます。例えば、1877年の東京大学は旧加賀前田藩邸跡地に誕生しますが、さらにそれより前、1858年旧中津藩邸で誕生した福澤諭吉の慶応義塾が1871年に旧島原藩邸等に移転します。

それが大正前後になると、日本全体で進行した都市化や、あるいは関東大震災等による被災によってキャンパスが**郊外**に移転し始めます。とくに有名なケースが、1922年の関西大学の千里山キャンパスへの移転、そして1929年の関西学院の上ヶ原キャンパスへの移転です。前者は北大阪電気鉄道（のちに阪急に吸収）、後者は阪急電車のイニシアティブによるものでした。

こうして各地にひろがった大学の周辺にはどくどくの文化を持った**大学町**が誕生します。高校生の皆さんにとっては自らの進学先、そして大学生の皆さんには通っているキャンパスがどのような経緯で誕生し、それがまちづくりにどのように関係していたのか、オープンキャンパスの際などに、大学のキャンパスだけでなく、その周辺のまちの様子もリサーチしてみるのも、興味深いかもしれません。

## 神戸を中心とした山岳スポーツ

さて、時計の針を戻しましょう。居留地に暮らしていた外国人たちは封建社会下では移動範囲が制約されていました。限られたエリアの中で、リゾートの場として六甲山に着目しました。外国人達は登山を楽しみ、山頂付近に山荘を建てて、ゴルフコースを整備し、そこでゴルフやスキーを楽しみ始めたのが六甲山における**山岳リゾート**の嚆矢であり、またこれが日本の山岳リゾートの起源といわれています。

特に有名なのが、貿易商のA・H・グルーム<sup>2</sup>です。かれは六甲山頂付近に山荘を設けて日本初の4コースからなるゴルフコースを開設しました。古来より日本では、山、特に奥の山頂付近の部分は遊興の場所ではなく、信仰や生活の糧を得る場所でした。山の中でも人里に近い里山、その奥にある奥山というように空間が分けられ、里山では薪や炭の材料、さまざまな狩猟、採取が行われていましたが、奥山は神の住む場所として信仰の対象となり、軽々に立ち入るべき場所ではありませんでした。そのために山で遊ぶ、山で憩うという文化が日本にはそれまでありませんでした。

一方で有名な話ですが、六甲山は明治初期にはいわゆる**禿山**であったことが知られています。特に江戸時代後期に薪炭を目的に伐採が進められ、かなり森林の少ないいわゆる荒れ山に近い様相を呈していたことが写真資料などから判明しています。そのために、山道を整備し、ゴルフ場などの山岳リゾートを開発するにあたり、現在のような重機のない時代においてもさほど苦勞することなく進められたのかもしれませんが。また六甲山の頂上部はなだらかであったことから、地形的な面においてもゴルフ場やスキー場を整備する上で有利だったのでしょう。

また、冬には頂上付近のため池に氷がはり、スキーだけでなくスケートが楽しめたようで、これは昭和の中期ごろまでよく見られた光景とのことです。

現在では、温暖化により、積雪や氷結も減少し、**ウィンタースポーツ**のメッカとしての姿も失われました。

## 電鉄会社などによるリゾート・ハイキング開発

一方、こうした山岳リゾートに関連してか、電鉄会社は1930年頃から本格化するハイキングブーム等に対応して、沿線各地でハイキングコースや各種のレクリエーション施設を整えていきます。例えば、阪急は1934年に「阪急ワンダーフォーゲルの会」を発足させるなど、沿線のリゾート資源を開発します（当時、大軌と呼ばれた近鉄では、奈良などでハイキングにあわせて史跡めぐりのコースを開発します；山口、2013）。鉄道会社はこのようにして、阪急の実質的創業者小林一三氏の「乗客は電車が創造する」という言葉を実践していったのです。

とくに六甲山をめぐるのは、阪急電鉄と阪神電鉄が開発にしのぎを削ったことが知られています。その結果、交通手段としてロープウェイやケーブルカー、そして山上に多くのホテルや保養施設が建設され、一般市民にも親しまれる存在となっていきます。

（後編に続く）

---

<sup>2</sup> アーサー・ヘスケス・グルーム (Arthur Hesketh Groom; 1846~1918)、幕末に来日、神戸でから明治にかけて日本茶の輸出、紅茶の輸入などを手がけるほか、オリエンタルホテルの経営なども手がけました。